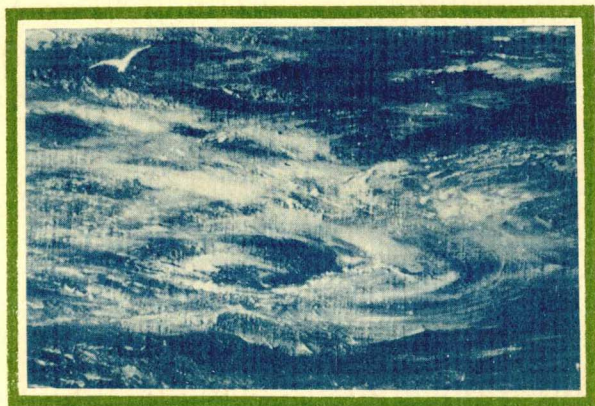


洋からの便り

うみ

—ある漁撈長の航跡—



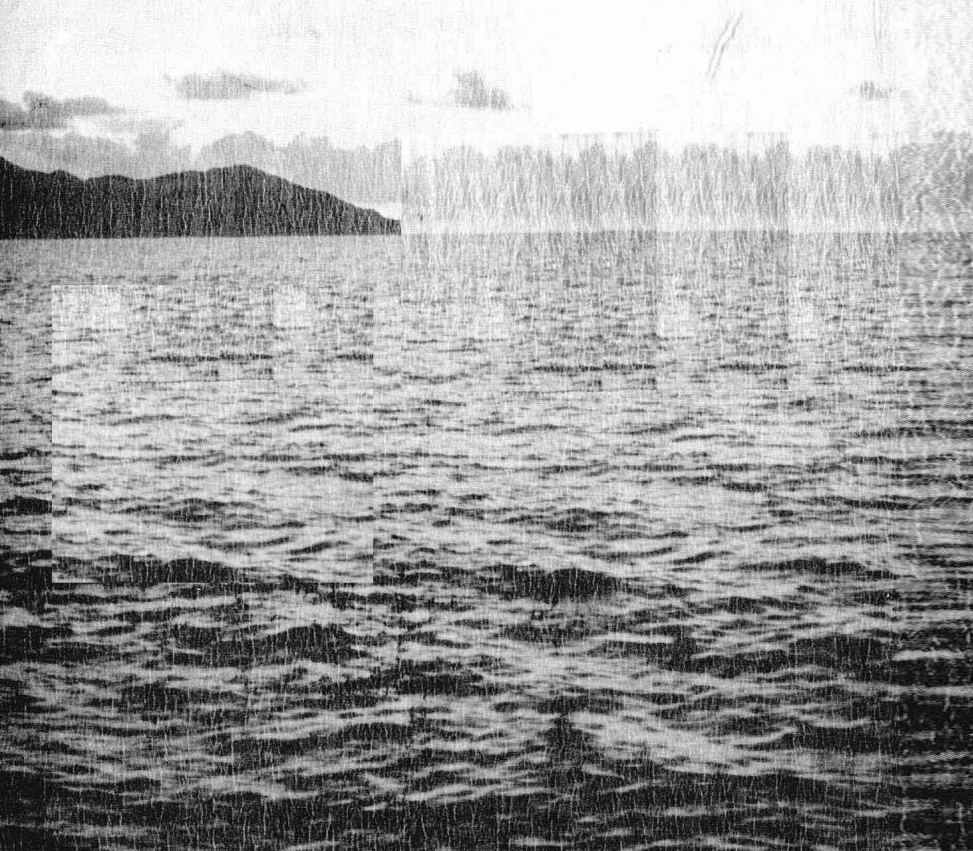
松風ひとみ編

海文堂

洋からの便り

—ある漁撈長の航跡—

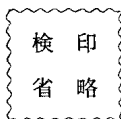
松風ひとみ編



洋(うみ)からの便り—ある漁撈長の航跡—

定価はカバーに
表示しました。

昭和52年7月25日 初版発行 ©1977 Hitomi Matukaze



編 者 松 風 ひ と み

発 行 者 海文堂出版株式会社

代 表 岡田 吉弘

印 刷 文栄印刷

製 本 三浦製本所

発 行 所 海文堂出版株式会社



本 社 東京都千代田区神田神保町2の48

〒101 電話 (261) 0246 振替東京 2873

神戸支店 神戸市生田区元町通3丁目146

PRINTED IN JAPAN 〒650 電話 (331) 2664 振替神戸 815

まえがきにかえて

父は今、遠い北大西洋モロッコ沖の底深く眠っています。

父は、三〇年近くもマグロ漁船に乗り組んだ「海の男」でした。「海の男」というと、聞こえはいいかもしれませんが、しかし、それは想像以上に厳しい職業なのです。大型化されたとはいっても、一年近くにもわたる、船の中だけの生活。そして漁撈長であった父には、二十数人の乗組員の生活がそのままのしかかっているのです。絶えず要求される適確な漁場選定、漁法。そして更に最近では領海問題、漁獲の減少、船舶の大型化、増加による海上交通の危険等、複雑な問題もからみ、漁撈長の責任は重くなるばかりでした。父も、ここ二年程、苦しい仕事が続いていました。太平洋でしか、操業をしたことのなかった父が、大西洋に初めて出かけていったのも、少しでも早く多く魚を獲るためだったのです。それが、父の最後の航海となってしまったのです。

最後の別れとなった一昨年の一月の寒い朝、父は「今度の航海に自分を賭けてみるんだ」といって、大学入試を控えていた私の手を握って「ガンパロウ」と自らをも励ます様にして、出港していきました。その航海に賭けた父の執念は大変なものでした。新しい漁法をとりいれたり、眠る時間を惜しんで海図を調べたりの日日だったと聞きました。父は、あの航海を自分の三〇年近い海での仕事の総結集とするつもりだったのでしょうか。

そんな父を奪ったのは、ほんの何秒かの違いで避けることのできた衝突事故でした。父はその時、船の最高責任者として、また、海の男の本能から、衝突現場にいた人の名を呼びながらそこへ向かう途中、ガスにやられ、船と共に沈んだのです。それはあんなに意気込んでいた操業を始めたばかりの時でした。父はどんなに無念だったことでしょう。

もちろん、父のものは何一つ戻っては来ませんでした。私に残されたものは、今迄、私と父とを結んでいた手紙だけでした。

遠い海の向こうから書き送ってくる父の手紙は、いつも何枚もの便箋に日常のこと、父の人生観など、さまざまな事を書き綴ったものでした。今、その手紙を一枚一枚読みかえす時、そこに今まで読みすごしていた父の考えに気付くのです。

「洋々たる海は際限なく広く、希望があるのだ」と、父は海を信じ愛していました。しかし、父は海の男であると同時に、私の父であつたのです。父が三〇年間の海での生活でいつも思っていたこと——それは、毎日家族と一緒に暮らせる生活をしたいということでした。父の手紙には、こういう言葉もありました。「親子の喜怒哀楽がどれ程感動的であるか、年中父親が家に戻る家庭では理解出来まい」という言葉は、一年のうちほとんどを離れて暮らす家族のことを思っていた父の心の反射光となつていたのでした。

父の死んだその日から、ずっと私の胸にのしかかつていること。それは中学生の頃、反抗期のせいもあつたかもしれませんが、父の仕事を理解せず、海でしか暮らせないくせにとさえ思つたことです。父の安らぎの場であるはずの家族の一人がそんなことを思つていては、きっと父も情けない思ひだつたことと思います。しかし、その時も、父は何もいわず、ただいつものように手紙を書いてくれました。父は、私が自分で海の仕事の厳しさを知るのを待っていたのかもしれませんが。

やっど、父を少しづつでも理解でき、そしてこれから、人生について、海での仕事について話を聞きたいと思つていた時、突然、父は去ってしまったのです。

今、私の思っていること、それは、父の夢だつた父の本を出すことです。父の今

迄の経験をまとめ、遠洋漁業の実態を一人でも多くの人に知ってもらいたいという夢を、私が、父の手紙をまとめ、遠洋漁業、そして海難事故の実態を綴ることによって、かなえてあげたいと思うのです。何も夢を果たせず海に果てた父の人生を覚えておくために……。

△五十一年度NHK青年の主張コンクール東京大会に参加した時の原稿を再録したもの▽

洋
(うみ)
からの便り

恒之の結婚するまでの記録

大正十四年九月六日

徳島市津田町二丁目九二番地にて父山田象太

郎・母山田シゲリの三男として出生

昭和七年四月

徳島市立津田尋常高等小学校に入學

昭和十五年二月

祖父松風寅太郎の養子となり、これより以後、松

風姓を名乗る

昭和十五年三月

徳島市立津田尋常高等小学校高等科卒業

昭和十五年四月

徳島市佐古町 東邦精密工場に勤務

昭和二十年一月

召集を受け西部第三十三部隊に入隊し、満洲に渡る

昭和二十年五月

本土防衛の為、内地に帰国。高知にて終戦を迎えるが残務整理の為、九月に帰宅、その後失業のた

め祖父と共に沿岸漁業に従事する

昭和二十二年五月

神奈川県三浦市三崎に来る。住吉漁業の第十住吉

丸（木船一四五トン）の機関部員として初めて遠

洋鮪船に乗る

昭和二十三年十二月

同会社の第二十一住吉丸（一五八トン）に昭和二

十五年二月迄乗る

昭和二十六年十月

乙種二等機関士資格修得後、第二十一住吉丸の機

関長として乗船

昭和二十九年三月

第二十一住吉丸、ニューギニア沖にて坐礁遭難す

るも無事救助され帰国

昭和二十九年四月

同会社の第六住吉丸（一九六トン）機関長として

乗船

昭和二十九年十二月

徳島県日和佐町漁業協同組合他三組合が協進丸鯉

鮪組合を設立。それと同時に住吉漁業を退社。第

一協進丸機関長として乗船。

洋からの便り／目次

まえがきにかえて……………	一
洋からの便り……………	一
海難記録……………	一五
証言……………	一五
交信記録……………	一七
報告書……………	一八
あとがき……………	一九

■恒之から喜美栄へ

結婚間もなく別れた妻に寄す。

出帆の際はあわただしさに追われ、御別れの言葉も交せず別れて来た事を後悔する。

だがその反面、貴女の悲しそうな顔を見ることが出来なかつたのです。これからはきつと笑顔で送ってくれることを希望する。

暑さに負けず自己の生活の展開に努力していることと思います。

すべての連なりから訣別して遠い三崎へ一人で来た君、そしてその頼りなす夫を沖へ送り出した君、淋しいでしょうがそこに何か新しいものを見出さないか、否見出そうと考えていることでしょう。

もし、その意欲が出たらどんどんやり給え。意欲のあるところに、ある時に、

昭和三十年七月四日（一九五五年）

徳島市津田浜ノ町三丁目、大和茂吉の三

女喜美栄と結婚。

吸収する力があるのです。

どうか元気で新しい生活をしっかりと築いて下さい。

洋（うみ）は涯なき希望をもたせ

やるせなき郷愁をそそる

■恒之から喜美栄へ

31・9

後僅かに三回（の操業）を残し、適水渡航（漁場を求めてあちこち航海すること）、不漁に不漁をかさねての航海だ。そうしたことに関係なく太陽は巡る。

美しい南海の夜空は、つかれた身体を、濁った心を慰めいやしてくれる。何か美しい物語を思い出す様だ。

優しい心持ち、思いやりのある行為、こうしたことが私には見あたらなない。いとも淋しい日々だ。

苦しい耐え得ぬ困窮を打ち破って生まれる、あのさやけきお互いの歌声も聞こえぬ。人々の心が荒もうと、お魚が獲れなくても私の仕事にはさして関係がない（結果的にはあるが）。同じ歩調で、リズムよく機関を運転することだ。内助のお

昭和三十一年九月二十九日（一九五六年）

インド洋出漁中、長女ひとみ出生。

前のことがよく判ると云うのは此処の所だ。

しっかり大地に根を張り給え。どんな風雨にも負けない立派な根を、そして平和な我家にするまでは、きつときつと泣かないで頑張ろう。

恒之

■恒之からひとみへ

31・9

ひとみくん

あなたが生まれた時は、私ははるか遠い幾千哩の洋(うみ)の上で鮪(まぐろ)を獲っていた。そして電報で知った時の感激は生まれて初めての喜びだ。その時から、ひとみの人生が始まり、私の父としての第二の人生が始まったのです。

ひとみの生まれた時の様子は、だから知らない。でも電報を受取った日は大変お魚が獲れて大漁だった、空も碧く洋も凪(な)いで、ひとみの人生をととても大自然が喜んでくれた。どうか心の優しい、美しい人になって下さい。

恒之

■恒之から喜美栄へ

31・10・14

先ず此の手紙が私より先に相見のことを御知らせせねばならない。それは都合で徳島水産高校の練習船阿洲丸と会合して御願いしたのです。

日本を去る六五〇〇哩洋の彼方です、折りにふれ、時の訪れにともないて所信や思い出や慕情は書き綴って来ましたが、今改めて「ひとみ」の出産を心からお祝いたします。と一緒に、十ヶ月にわたる新しい命の培いに、苦節と闘った貴女自身の手すべてに深い感謝の心を捧げます。初めての出産で不安で一杯であつたらうが、心にかけてながらも遠く離れていて慰めの言葉もかけて上げること出来なかつた事も残念だ。欲はいわぬ、普通の子供であればと思つた。これからだんだん欲が出るのであるうが、今のこの子供に対する愛情を生涯忘れず見守つてやりたものだ。これが私の子供に対する初めての愛情であらう。

此の航海は予定より長くなつた。今から二十回操業して帰途に三十日かかる。あと五十日、十二月に入ることであらう。

今午前三時、揚げ縄終り阿洲丸へ向け走っている。三つの機関と二つの冷機、それに附属する十幾つかの電気機械、その音と暑さで機関室は一杯だ。少し睡くなり字がうまく書けない。帰る船に会合するのはなんとなくいまいましい。でも元氣を出して二十回頑張らしましょう。貴女もそのつもりでしっかり頼みます。内

地は今が一番良き季候ですね、赤ん坊を育てるのに一番良いとある船員さんが云ってくれました。皆「ひとみ」の出生を大変喜んでくれています。 恒 之

■恒之から喜美栄へ

31・11

二人とも元気なのかね

お前達もきつと尋ねたいだろう

あなたも元気ですかと

元気だとも、どんなことがあっても

生き抜くのだよ、といつもいつて聞かせている

こんな力を生み出すものは、愛情なのだ

便りがない、笑顔がない、小言が多い

愛情の足りないことになるのかね

いつも気につけ、それを糧に生きている

これ以上の愛情があるかね

自由に表現し得ない電文などは

もうそらぞらしくて打てなくなったのだ
打電しようと思えば、こうして手紙を書く
それがなにより真実のように思われる。

恒之

■恒之から喜美栄へ

寝苦しき日々の明け暮れた出港前の数日、いつかはやって来ることながら、さてやってこられたら悲しいものだ。

風邪気味もようやく、洋の風ぐのと同じように消えて行く。またこれから三月、洋の生活の思い出を綴ろうと書き始めた。

一つの惰性のようになってしまうって新鮮なものを感じさせないことだろうが、これが洋上生活の特有の無味な味なのだと思う。

昔の帆船と違い風まかせなど呑気なことはいってられない。一日の諸経費が拾幾万円もかかるといわれている近代船である以上、やすやすと出港の一日延期も

昭和三十三年三月（一九五七年）
乙種機関長資格修得。

出せなかったことだろう。

これからこの手紙に書く事柄は、せめて紙面にだけでも美しく咲く白梅のような香り高きものになりたいと思う。したがって感傷や泣き事が堂々と歩き出すこともある。叱責やお説教もある。盛沢山にもった食卓が食はず終いのようになるかも知れぬが暇を見て書くこと、また一連の綴りも、途切れがちになる。それでも事前に書く心持ちはもっているつもりなのだ。もう明日あたり、すっかり海も風ぐことであろう。

そうしたら、仕事が始まる

そうしたら、また考案も始まる

そうしたら、洋の生活がいきいきと生気をとりもどす

出港の夜 恒之

■恒之から喜美栄へ

いづみの出生を祝いて

昭和三十三年四月十八日（一九五八年）
東太平洋出漁中、次女いづみ出生。